

文化庁アートプラットフォーム事業 文化庁現代アートワークショップ
Art Platform Japan Bunka-cho Contemporary Art Workshop

セッション 5

東アジアにおける官設展覧会と日本

モデレーター 稲賀繁美 (京都精華大学)

登壇者 喜多恵美子 (大谷大学) 王宇鵬 (中国広西師範大学) 江川佳秀 (徳島県立近代美術館)

コメンテーター ラワンチャイクン寿子 (福岡アジア美術館)

オブザーバー 加治屋健司 (東京大学大学院)

Session 5

East Asian Art Competitions and Japan

Moderator Inaga Shigemi (Kyoto Seika University)

Speakers Kida Emiko (Otani University) Wang Yupeng (Guangxi Normal University)

Egawa Yoshihide (Tokushima Prefectural Museum of Modern Art)

Discussant Rawanchaikul Toshiko (Fukuoka Asian Art Museum)

Observer Kajiya Kenji (The University of Tokyo)

2022年1月29日 17:00-19:30

January 29, 2022, 5pm-7:30pm (JTS)



喜多恵美子 (大谷大学教授。朝鮮近現代美術史、韓国・朝鮮文化史、植民地史研究)

近代西欧の概念である「美術」が非西欧社会で導入される過程でいかなる変容をしていったのかが問題意識の根底にある。主な論考としては、「朝鮮美術展覧会と朝鮮における「美術」受容」『「帝国」と美術 一九三〇年代日本の対外美術戦略』(国書刊行会、2010年)、「아방가르드와 한일 프롤레타리아 예술운동 (アバンギャルドと韓日プロレタリア芸術運動)」『미학예술학연구 (美学芸術学研究)』(미학예술학회 (美学芸術学会), 2013)、「新しい「朝鮮画」－主体美論の実践－」『北朝鮮を知るための55章』(明石書店、2019年)、「在朝鮮日本人画家とツーリズム－加藤松林人を中心に－」『大谷学報』(大谷学会、2020年)。プロレタリア美術運動における日朝交流の研究で、金復鎮美術理論賞受賞(韓国、2015年)。

王宇鵬 (中国広西師範大学美術学院講師)

2019年山口大学大学院東アジア研究科博士課程修了。博士(学術)。2019年から2021年まで山口大学東アジアラボ研究推進体特別研究員。2021年より中国・広西師範大学美術学院講師。研究分野は美術教育、美術教育史。主な論文に「台湾の近代美術における初等美術教育と日本の影響についての一考察」『美術教育学研究』(大学美術教育学会、2017年)、「日本統治時代の美術教育が台湾の近代美術に果たした役割 台北師範学校を中心に」『美術教育学研究』(大学美術教育学会、2018年)など。

江川佳秀 (徳島県立近代美術館)

1988年から徳島県立近代美術館の開設準備に携わり、1990年の開館とともに同館学芸員。2019年より現職。日本近代美術を中心に日欧及び東アジアの文化交流を研究。主な企画展に「薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち」(1998年)、「巴里憧憬 エコール・ド・パリと日本の画家たち」(2006年)など。主な論文に「大連のシュルレアリスム「五果会」をめぐって」(『日本美術襍稿 佐々木剛三先生古稀記念論文集』明德出版社、1998年)、「日本美術の後背地 日本人美術家にとっての「満洲」」(『日本美術史の杜 村重寧先生星山晋也先生古稀記念論文集』竹林舎、2008年)、「満洲国美術展覧会をめぐって」(『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』東京文化財研究所、2009年)など。

コメンテーター：

ラワンチャイクン寿子 (福岡アジア美術館学芸員)

同館の開館(1999年)準備時代からアジア美術の作品収集や展覧会企画にたずさわる。近年は、主に東アジア・東南アジアの近代美術を担当。『南洋1950-65』(2002年)、『チャイナ・ドリーム』(2004年)、『日本時代の台湾絵画』(2006年)、『東京・ソウル・台北・長春一官展にみる近代美術』(2014年)、『イメージー争いのない世界へ』(2015年)などを企画。また福岡トリエンナーレの初回から運営に関わる。

モデレーター：

稲賀繁美（京都精華大学国際文化学部教授、国際文化学部学部長）

東京大学大学院比較文学比較文化専攻満期退学・パリ第7大学博士課程終了。三重大学助教授を経て、国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学名誉教授。放送大学客員教授。専門は比較学・比較文化。主要著書に『絵画の黄昏 エドワード・マネ没後の闘争』『絵画の東方 オリエンタリズムからジャポニスムへ』『絵画の臨界 近代東アジア美術史の桎梏と命運』3 暗部作のほか『接触造形論 触れ合う魂 紡がれる形』など。ジャポネズリー学会賞、サントリー学芸賞、倫雅美術奨励賞、和辻哲郎文科賞、フランス建築アカデミー出版賞など受賞。

オブザーバー：

加治屋健司（東京大学大学院総合文化研究科教授、日本現代アート委員会委員）

美術史家。第二次世界大戦後の日米の美術と美術批評を中心に研究。広島市立大学芸術学部准教授、京都市立芸術大学芸術資源研究センター准教授を経て、2016 年東京大学大学院総合文化研究科准教授、2019 年より現職。日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ代表、東京大学芸術創造連携研究機構副機構長。著書に『アンフォルム化するモダニズム カラーフィールド絵画と 20 世紀アメリカ文化』（東京大学出版会、近刊）、編著に『宇佐美圭司 よみがえる画家』（東京大学出版会、2021 年）、共編著に *From Postwar to Postmodern, Art in Japan 1945–1989: Primary Documents* (New York: Museum of Modern Art, 2012) など。